千里の魔女の道

翔帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
千里の魔女の道

【Ｎコード】
Ｎ１７１７Ｎ

【作者名】
翔帆

【あらすじ】
味気なく、つまらない毎日を繰り返しで生きている少年、である俺……
そんな俺は、小さな公園であいつに会った。
それで俺にこう言ったんだよ、
「私、魔女になってみたい」
この世には面白いことを言うやつもいたもんだ、だがそんなものはいない、すごく馬鹿げてると思った、だがそいつの純粋な瞳につられて俺も馬鹿なことを思った。その夢をかなえさせてあげたいと。

そんなことを思った時から俺のくだらない毎日は終わり始めていた。

プロローグ（前書き）

これは、自己満足に過ぎないです。どっかの設定などまねしている部分があるかもしれません。自分にはわからないので、もし見ていて、いやな気持ちとかむかついた時には、見るのをやめてもらってもいいです。

プロローグ

この休み中ずっと家に居た、特に理由はない、ただ家にいただけだ。

友達なんか俺を相手にしないだろうし、家族とも話すこともない、父と母は海外で仕事をしている。

だいたい四年目だろうか？

もちろん家には誰もいない、俺一人しか……いや一人いたな、ばあちゃんがいた、父の方のばあちゃんが。

朝、起きたら料理がラップにくるまってる。これを食べていてください、ちょっと散歩してきます。それをいつも淡々と食べる。元気なばあちゃんで近所を回って立ち話、それが朝の日課のようだ、だけどちょっとじゃすまされない時がある、夕方まで帰ってこないときとか、次の日の朝、近所の住人に連れられて帰ってきたなんてこともあった、何て元気で迷惑なばあちゃんだ、お年寄りらしく穏やかに生きていてほしいものだ。ほとんど家に居ないため俺は、家に一人でいることになり、こんな無駄なことを考える時間もある。

そんなことを繰り返してこの休みも今日で終わり、これからは高校生活が始まる。中学とさほど変わらないだろう、義務教育から脱出したとはいえ、中学や高校は大学に入るための準備期間でしかないから、なにも変わらないと自分の中であきらめている。また一人で登校し、一人で昼を食べ、帰ってきて作ってある料理を食べ、そして俺の宝を整備する。ただの毎日、今までと同じの毎日、くだらない毎日、それで俺は、何をしたいんだろう。

小学生のころの俺は夢にあふれていた、大工さんになる、料理人になる、飛行機の運転手になる、怪獣になる、お化けになる、そして――魔法使いになる。

俺はすごくバカだったんだと思う、そんなものはこの世にはいない、それを知ったのは、中学に入ってからのすぐのことだった。夢

を作文にする授業があり、一番なりたかった魔法使いを選んだ、それを恥ずかしげもなく堂々と発表した、もちろん馬鹿にされ、からかわた、だから俺は睨んでから殴ってやった、そこから殴り合いの始まり、先生がすぐに来なかったら、保健室から校長室行きじゃすまされなかったかもしれない、病院、警察なんてことになっていたんじゃないだろうか。

そこから俺は一人になった。小学生から魔法使いになる夢を応援してくれた友達も面白半分で言ったのだということを下駄箱の陰で聞いた、息を殺し、涙を堪え、現実を知った俺はもう魔法使いなんで言葉は出さなくなった。そこからは、少し友達もでき、くだらない毎日が送られた。

その毎日は、つまらないことに笑って、クラスで権力のある人に逆らわず賛成し、ぱしりみたいにこき使われても笑顔でこなすことだたった、少しの友達とはそんなやつらでもある。

時々考える、もし魔法が使えたら、何をしようか……俺のことを馬鹿にしたやつらを見返してやろうか、それか金を出そうか、それとも誰かの願いをかなえようか。

最近はよく魔法について考える、もう終わったと思ったのに、まだあきらめがつかないのか、そんなものはこの世にはいない。あきらめろ。

そんなことを考えている中カーテンの隙間から日差しが漏れているのにきずいた。

その日、俺は初めて徹夜をした。

第一章

今日から新しい学校で新しい生活をする、そんな晴々しい朝、登校途中の俺は全力で溜息をついた。眠くてかなりだるい。それは、他人が見てもそう見えるだろう。登校する少し前、鏡をみた、すごい顔だった顔色は悪く、青っぽくなっていた。それから眼の下にはばっちり隈があった、それはもうばっちりと。初めての徹夜なのだからだろうか？腕に力はなく、だらりと垂れ、足取りは重い、俺は決めたもう絶対徹夜はしない。

「あっ、おかーさんゾンビさんがいるよ」

近くを通った、幼稚園児がそんなことを言っている。

「しっ、言ってはいけません、失礼でしょ」

俺は気になって声のする方を見た、園児はこっちを指差していて、となりを歩いていた母親の目と俺の目が合った。すぐに目をそらし苦笑いを浮かべている。

園児よ……そんなにも俺の顔はひどかったのか……

そんなことより、今日は入学式だ早く行かないとさすがに遅刻はまずいことになるだろう、だかゾンビと言われた俺の体は限界に達していた。とりあえず寝たい、ゾンビの脳は休息を求めていた。俺は近くに公園を見つけた。時間もある、少し仮眠をしよう、たった十分だ。だけどそれ以上寝てしまったら……。それだけ、ただの十分だけだ。理性と本能に揺れる自分に言い聞かせ俺は寝ることにした。結構、苦しい二択だった。門から入り、その門に犬がいた。そいつは少し歩くとこっちを見た。

俺を案内してるのか？その案内に乗った、右手にある手洗いを過ぎて公園の一番奥、木陰になっているところのベンチを見つけてそこに寝転がった。

「お前、いいところ知ってるじゃん」

そのまま犬は歩いてどっかに行った。睡魔に襲われていたせいか

すぐ眠くなり。意識が消えた。
これは、夢？昔の記憶のようだ。色は薄く、ぼやけていた。
さっきの公園で俺が横になったベンチにばあちゃんが座っている。滑り台のほうから昔の俺が走ってきた、手と足が一緒に出ている。なんて不格好な走り方だ。ばあちゃんに貰ったお茶を飲みながら言った。
「ねえ、おばあちゃん。僕、魔法使いになりたい」
ばあちゃんは少し驚いた顔をして、そのあと満面の笑みを浮かべた。
「なれるよ、きっと――」
ばあちゃんの言葉が途切れた。どうしたんだ？
「おばあちゃん？」
「この世界には、神様だって、天使だって、魔法使いだって、死神だっている。ただ……人が知らないだけ」
「じゃあ僕もなれるかな？死神はいやだけど」
「そうさ、なれるさ。おばあちゃん応援しちゃうよ！」
そう言ってばあちゃんは立ち上がり、応援し始めた。それはそれは周りの家に聞こえるぐらい。
俺は恥ずかしくなった。
一通り応援歌を聞いたあと、遊びに行ってくると言って、子供の俺は滑り台へと戻って行った。あの不格好な走りで。
ばあちゃんは俺の小さな背中に向かって小さくつぶやいた。
「勇気、お前の背中に――」
俺はゆっくりと目を開けた、ここどこだ？あーさっき、寝た公園……あれから何時間たったんだ？
それより、なにより。
「うっせーーーーーーーっ、ちっとは黙っとけ静かに寝てられねーだろ！」
寝起きが悪い、寝起きに不快なことがあるときれる。
俺は不快となった元凶をさがした、滑り台には俺の声に驚いだ子

供が涙目をこすっていた。砂場、ブランコにはそれらしきものは見つからない。
　あんなにでかい音だったのに、何かをうちつけるような音と……呪文みたいななにか？俺はもう一度寝ようと寝がえりをうった。それで俺はわかった、それはすく後ろに居たのだから。昼間なのに黒い服でフードのあるものを着ている、ずいぶん暑そうだ。しかも頭にロウソクを巻き、木にはわらで作った人形、わら人形だ。それが釘によって、頭を貫かれている。
「そこで何してる？」
　腰と手を地面につけ、手の近くには鉄鎚が転がっている。
　誰かを呪う気か？
「ええと、あなたがいきなり怒鳴り声揚げるからびっくりしちゃって」
「いや、そうじゃなくて。そんなローブ着て、わら人形に鉄鎚なんて」
「えっと、私はこうしたら魔女になれるって聞いたから……私、魔女になりたいんだ」
　そのコンビは誰かを呪う以外考えられない。魔女っぽいことには変わりないんだが……
「えっ、魔女になりたいわけ？それってつまり……」
　つまり、魔法使いってことになる、まだこんなやつがいたのか。なんだか懐かしい響き。
「そう、魔法使い。いいよねー自分のしたいことが現実になる。一つの呪文で今の何かが変わる、そう考えると、すごくいいと思うよね？」
　おおっなんか俺に聞いてきた、俺はどう答えたらいいんだ？そんなものはないあきらめろ、現実をみるんだ。そんなことをしてもむなしくなるだけだ。俺がそうだったように。そんな脳内での考えは無駄だった、もうすでに口が開いていたから。
「いいねそれ、あこがれる」

心に太陽が宿ったみたいにあったかくなった、俺も昔はそんなことを思ってた。
「そうだよね、魔女になったら私、いろいろかなえたいことあるんだ。えっと、おなかいっぱいにケーキを食べて、あっ空も飛んでみたいな、それと……あと……いやそれとも……」
俺は本当の笑顔をそこでみたきがした、作り笑いじゃない。本当の笑顔。純粋な瞳。俺の終わった夢をまだ持っているやつがいる。そいつの夢かなえてやりたい、これほど強く思ったことはない、だがその夢はたしてかなうのだろうか？いやかなえてやろう。これは俺の俺自身での――約束だ。
「とことで、そのわらには誰の髪を入れたんだ？」
「ん？えっと、そこの犬の毛」
そんな犬なんて呪ってどうする気だよ、と軽く溜息。
そういえば、ベンチの下に犬がいるな。さっきの犬だ。ひどく震えているが、俺はその犬をみて呆気に取られた。犬の背骨のラインの毛が刈り取られている。このライン……バリカンか？
「あと……」
まだあるのか！今度はどの動物が犠牲に、俺は犬を見ながら。泣けそうなほど悲しくなってきた、ごめんよお前は何も悪くない。悪いのはあの女だ！安心しろ毛はそのうち生える、そんなに震えるなよ。
「ん……」
こっちを指差した。ん？あー俺か、人の毛も混ぜないとな。って
「まさか、いやまさかねー」
おそるおそる手を伸ばした、この緊張感はなんとも言えないものだった。手が頭に触れた。涙が出た。犬が頭上から降ってくるものをよけるように外に出てきた。それで俺をじっと見て、いつか髪は生える、気にするな、お前もがんばれと言いたそうな顔でうなずいていた。気がした。それから、去って行った、その背中は太陽の光を反射していて輝いていた。

俺の頭はもみあげの部分をバリカンで五厘、それから後頭部を五厘。落ち武者の正反対の頭だと思えばいい、これはひどい。溜息をついた、ほんと今日はよく出る。

良く見たら、わらの頭から茶髪が見える。犬の毛だな、あれ俺の毛が見当たらない。

あっ……わらと供に編まれていた。

「ねえ、これちょっと打ち込むの手伝って。はいこれ」

三体のわら人形が手渡された。もちろん、頭は茶髪に、体には俺の毛がはいったやつが。なぜ、お前はこんなことをしてしまったんだ。溜息をついた、今日一番についたのよりもでかかった。

そして俺は、徹夜をしてしまったこと、公園に寝てしまったこと、変な約束を己の中でしてしまったことを――後悔した。その後悔を恨みにして俺に（犬にも）呪いをかけることにした。犬はおまけだ。高速で、手の限界を超えた動きで打ちつけた。

その中でふと思った、

「そういえば、お前の名前は？俺は神田勇気（かんだゆうき）」

「私は、秋坂千里（あきさかちさと）」

その日は、釘と鉄鎚がぶつかり合う音が響くこととなった。

夜中まで男のすすり泣く声とわけのわからない呪文と唱えてる女の声が、その付近の住人に七不思議の一つを作らせた。

第二章（前書き）

学校／学園、ファンタジーとしときながら全然出さなくてすいません、次から出していこうと思います。すいませんでした。

第二章

腕が痛い、二の腕のあたりが筋肉痛だ。俺は学校に行く道を歩き歩き、腕をさすった。昨日のあれのせいだな。俺は昨日、夜中まで呪いをかけていいた、自分自身に。

ばあちゃんは俺が夜中に帰ってきたというのに、心配するわけでもなく。さっさと寝ていた。朝起きた時、大爆笑された。あの頭を見たらしい、それで俺はもちろんきれた。

「しかたねーだろ、これは俺の意思じゃねー」

とばあちゃんに言い寄った、そのとき転がっていた何かが俺の脚に当たった。俺は毛を発見した。これは……鬘(かつら)？そう。それは、ばあちゃんの鬘だった。こりゃあいいや、多少カールがかかっていて、ばあさんくさいが天然パーマということでやっていこう。

「この毛は俺が貰っていく」

俺はそれをつかみ頭にのせた。なんか感激、俺の髪じゃないみたいだ。

「やめてくれー、それがないと鬘がないとあたしは……」肩を落とし、がっくりしている。

そういえばなんで今日は、散歩行ってないんだと疑問になり、

「散歩どうしたんだ？」

「勇気が心配でな、夜遅くに帰ってきただろ？」

ばあちゃん起きてたのか。

「勇気、なんだか昨日より、顔の表情が良くなった。昔みたいに生き生きしているよ」嬉しそうな顔で出かけて行った。かつらないのにな……

そんなわけで、今、俺の頭にはかつらがのっている。前の頭よりはましだ。それより何か大事なことを忘れている気がするんだよな。

「あー勇気、発見！」

聞き覚えのある声が聞こえた。俺は昨日の場所に立っていた。昨

日、散々聞いた声。見たくなかったがそっちをみた。まだローブ着てるよ。
「お前、それ熱くないのか？脱いだほうがいいぞ」
俺はそれとなく言った。気味が悪いぞ何て言えない。
「えっ、全然大丈夫だけど？」
あー俺の希望を打ち砕いた。それから俺の体を見回した、なんだかドキドキする。何を思ったのかいきなりそのローブを脱ぎだした。その下から現れたものは……。
「どう？似合ってる？このセーラー服」
そこに現れたのはセーラー服を着たさわやかな女の子だった。髪は短く、寝ぐせらしいものが跳ね上がっている。だけと肌は白く、奇麗だった。ずいぶんとにあってる。
「私、昨日高校の入学式だったんだけど忘れてて」
そうだ、入学式があったんだ。それか大事なことって。
「なあ、入学式に出なかったら。そうなるんだ？」
「知らないよ、私初めてだから」
俺もだよ。普通はやらないからな。そんなことより学校だ。今日は休みのはずなんだが呼び出されて、向かわないといけない。止めていた足を動かした。
後からそいつはついてきた。
「その制服俺と同じ東乃高か？」
東乃高とは俺が通う、東乃丘高等学校の略称だ。入学したのか良く分からないが。
「そうだよ、なんで？」
「じゃあいっしょに行かないか？」
「私はそのつもりだったけど」
だからついてきたわけね。
「だったらなんで俺の後ろなんだ」
「えっ、恋人と勘違いされたらいやだから」
目が本気だった。そんなにいやなのか。やっと学校に着いた。着

くまでの間、俺の後ろを重い足取りでついてきた。
その高校は丘の上にあり街を一望できる、街の中心にある。
「やっと着いた、坂が急すぎる。それと、そろそろ離してくれない？」
「あっごめん、途中から疲れてきちゃって」
坂の途中から服をつかんできて、重かった。いやそれほど重くはなかったかもしてない。疲れていてわからなくなっていた。
学校からあわてた足取りで人が出てきた。
「あ、あなた、神田勇気くん？」
「はいそうですが？なんですか？」
聞いてみた、だいたいどんなこと言うのかわかってたけど。
「入学式こなかったでしょ？校長先生が今、入学式をやってくれるそうよ。急いで体育館に来て」
校長に一言、言いたい。サンキュー。
「わかりました。ところでこいつは？」
後ろにいたやつを引っ張り出した。なぜか申し訳なさそうに、顔を俯けた。
「あら、あなたは……」
名簿を見始めた。何かを見つけたように目の動きが止まり、納得したようにうなずいた。
「どうしたんですか？」
「この子ね、入学式で。入学試験トップということであいさつしてもらうはずだったんだけど……」
その人は肩を落とした。わかる俺も同じ状況だったらそうなる。
俺はともかく、こいつはダメだろ。
「すいません！忘れてたんです。これから忘れませんから」
どこをどう忘れないようにするんだよ、入学式なんてもんは、もう無いぞ。
「とっ……とにかく！体育館に行ってね」
肩を落としたまま、こちらを数歩ごとに見ながら、戻って行った。

それから俺達は体育館のほうに向かった。この学校は高校にしては広い、大学のような広さだ、大学のほうも良く分からないが同じだろう。門の正面に学校の校舎がありさらに後ろに体育館がある。そこに入ったそこには二人分の椅子と校長だけが静かにそこにいた。
「はいりたまえ。入学式にでいなかったのはお前たち二人だけだ」
低く、威厳のある声は俺を畏縮させた。そして、後ろの……ああ、俺と同じか。見るからに体が縮こまっている。
「しつれいします」
体育館の中に入った。俺と校長だけなんていやな気分だな、もう一人いるけど、いないも同然に黙ってるし。
「そこの席に座れ」
「はい」
「結構冷静だね、私は緊張してるよ」
「いや俺だって……」
俺だって緊張はしてるさ。
「なぜ来なかったか理由を話せ、その理由によって私が入学を許可するか決める」
なんだそれ、これは入学式じゃないのか？さっきの俺のサンキューを返せ。
それは置いておいて、いい言葉を考えろ俺。ばあちゃんが倒れて……これはダメだ。早くしろ！じゃないと。
「えっと、私はこの人と釘でわら人形を木に打ちつけてました」
やっぱり……何て余計なことを言うんだ。俺と釘？なんか間違ってないか、俺で釘を打ちつけたみたいになってるじゃねえか。俺と一緒に、じゃないのかよ？それより。
「おまっ、何言ってんだよ」
校長に聞こえない声で言った。
「だってほんとのことでしょ？」
そうなんだが、そうなんだけれども。こいつは純粋というか何というか。

「そうじゃないだろ！もっと言いようがあっただろうが」
「なに、おばあちゃんが倒れました、だからいけませんでした。なんてこと言うつもりだったの！？」
俺も考えた。だが逆だ、うちのばあちゃんは元気ありすぎで困るくらいだ。
「そんなこと誰が言うか、ちなみに俺のばあちゃんは元気ありありだ。これでこの学校に通えるかどうかが決まるんだ。しっかりしろよ！」
昨日はこんなんじゃなかったはず、愛(いと)おしいとも感じたのに今のこいつは何だ。
「あっ、なんでそんな急に怒るの！昨日もいきなり」
「昨日は魔女になるためだとわらに釘を打ちつけ、俺の安眠を妨害したからぁ……」
そこまで言ってある目線にきずいた。それは俺の右からくるものだった。興奮していて、その声が体育館中に響いていた。目の前に居るやつは校長ではなく言い合ってたあいつで、校長は俺の右側に位置するステージの上に居た。気持ちが冷えた、マイナスまで下がった。
「お前は魔女になりたいのか？」
食いついてきた！
「ええ、そりゃあもう」
満面の笑顔で答えた。この笑顔は反則だな。
「ははははは、それは愉快だね。私もなってみようかねー魔女に」
「男がなれるかー」
しまった……
俺は顔を俯けた。それから汗が出てきた、やばい止まらない。
「やだっ、こっち来ないでよ。汗ばんでるから」
こいつ、俺の心情も知らないで。
「そうか、そうだよな。なれるわけないか。だったら魔法使いにはなれるか？」

「へっ……」
気の抜けた返事をしてしまった。だってそうだろ、意外な答えが返ってきたんだから。
「そう……ですね」
俺は顔をあげた、そこには厳しい顔はなかった。
「私はお前達のことが気にいったよ、特に千里ちゃん。かわいいし、大好きだ！」
「うぇぇー」
いやそうな顔してる。それはいやだろうな。
この人もしかしていい人？俺のサンキュー返さなくていいよ。
「今日からこの学校の生徒だ。痴話げんかも聞けたし、私が出てきて正解だった。楽しかったよ」
『あれは、痴話げんかなんかじゃないです』
その時、俺達の初ユニゾンが成功した。

帰り道は楽だ坂を下りていけばいい。
「学校の中で、あの人に会ったよな？」
学校で一番最初に会った人で俺達の担任だそうだ。
「そうだねー。大丈夫だった？校長に何かされなかった？って言ってた」
なんだか嬉しそうだった。俺も入れてうれしい、この学校に。
校長は、校内で面白いことが大好きなエロ魔人で有名らしい。
「そうだ、俺が家まで送ってやろうか？」
あの後、校長自ら校内を案内してくれた。なぜが飯をおごってもらった。お前らが気に入ったと言って。部活に来ていた男子生徒、数名に話しかける。校長、胴上げされ、俺、巻き込まれて。それを抜けだすのに一苦労した。あのときは何事かと思った。
男からは自分から声をかけずとも、「校長！あんたは神様だ」神と呼ぶやつ、「エロ魔人様ー」とあがめるやつがぞろぞろ集まってきた。しまいには「勇者様」と刻み込まれた銅像を発見した。女に

は「エロ魔人！」「変態！」「昨日、私のお尻触ったでしょー！」
「私は胸……もうやだ」と泣き出すなど、うらやまし……、いやひどかった。
俺達が来る前に何をやらかしたんだ校長は……
そんなこんなで、夕暮れになっていた。こいつ一人で帰らすも危ないから、最近夜な夜な痴漢がでてるらしいし、まさか校長……いやまさかな。
「んん、いいよ。一人で帰れる」
首を振ったあとそんなことを言った。
「どうして？最近物騒みだいだし」
「だって……」
少し考えた後、こっちを見て笑った。
「じゃあ、途中まで送ってもらおうかな？」
「わかった」
朝がそうだったように公園まで一緒の帰り道なのだろう。夕日が西の空を赤く染め、空に浮かぶ白い雲に太陽の色が半分塗られていて、東の空から迫ってくる闇もまた一つのキャンバスに描かれた絵のように奇麗だった。
それはそれでいいんだけど、
「なんで俺から離れて歩く！」
「せっかく送ってくれるって言ってくれたし」
理由になっていない。
「だったらもうちょっと近くでも」
何かある。
朝のそれとは違う気がした。朝は横ではなく後ろだった、しかもすぐ後ろ。なぜ今は、前に……あんな前に居るんだ？
「私はこれでいいの、これで」
良く分からないが、うれしそうだ。歩き方でわかる。軽くステップを踏みながら進んだ、時々その場で一回転してみたりしていた。そのたびにスカートがふわっとなる、そうなったら男の見るところ

はただ一つ。だが残念な結果に終わった。
公園にやっと着いたが、あたりは暗くなっていた。
「ここでいいよ、ありがとう」
朝もここで会ったな、なんか引っかかる。
あいつは今朝、脱ぎ捨てていたローブを着た。やっぱり着るんだ。
「今日は、ほんとありがとうね」
元気が足りないように感じた。あいつはあの笑顔で言ったのか、それとも……
フードを深くかぶってしまったため、俺にはその顔を確認することはできない。
「ああ、じゃあな、また明日学校で」
帰ろうと公園に背を向けた――
そのとき、服に違和感を感じた。服を引っ張られてる？後ろを向くと、あいつが服を軽くつまんでいた。
「おい、どうした？」
「えっ、何でもないよ、なんでもない」
「だったら離せよ」
離さなかった、それからでこを背中に押し当ててきた。泣いているのか？だかこんな真上からじゃ顔なんて見えるわけない、首も回らん。
「ごめん」
「離してくれないなら仕方ないよな」
そこの一番近いベンチに座った。あいつも座ってきた。
「どうしたんだ？」
こいつの考えていることが分からない。本当にどうしたんだ？
「なんでもない、気にしないで」
気になるんだが、まだつままれてるし。それから時間がたった。何分。何時間。どれだけ経ったのかはわからない。腹が減ったので持ってきていた昼用のパンを出して、半分あげた。その間も、ずっとつままれたままだった。

そして、
「よぅし、元気になったー！ありがとー」
「腹が減ってた、だけなのか？」
「そう、腹が減ってただけなんだー」
となりで笑ってる声がした。心配して損した。だったら素直に……あっ女だから言えなかったのか。やっとフードを取った。
そいつは笑顔で泣いていた。勢いよく立ちあがった。何ができるかわからなかったけど、何かしないといけない気がした。その時。
「あはははは、ちょっまって……あはははは」
勢いよく笑いだした、なんだなんだ。顔の前に鏡を出してきた。
「見てみてよ、あはははは」
あ……鬘がなくなっていて、下に落っこちていた。気持ち悪い頭があらわになっていた。
「ははは……はあ、忘れてた、髪無いの……」
あまりにもフィットしてたからわからなかった。
「面白かったー、ナイスギャグ！」
手を丸めて親指を立てていた。
「原因はお前だろうが！」
「そうだっけ？覚えてないなー」
「おい、にやけてやがるぞ」
「うそっ！」
顔をペタペタ触っている、だがまだにやけてる。
それで少ししてから帰った、明日の頭どうしようと考えながら。
それにしてもあの涙はなんだったんだ？まあ、いいか。眠い今日は疲れた。
明日、やっぱ鬘、駄目だな学校から帰ったら育毛剤買おう。そんなことを思いながら睡眠をすることにした。

第三章

だるい、疲れてる。昨日もその前も寝不足だ。登校中の俺は、徐々に細まっていく目を必死にこじ開けながら歩いていた。昨日は寝ようとした、寝ようとしたんだが……寝れなかった。理由はある、昨日のあれだ。もちろん髪のことではない。今日も抵抗するばあちゃんから目的の物を貰ってきた。言い方を変えたら強奪だ。

手に入れたそれをかばんの中に、髪が息を吹き返すまで使うことを決意した。だって恥ずかしいじゃないか、無いのは。髪が無くなるのは年を取ってからでいいし、そうなることが運命となっている。坊主という選択肢もあるがなんかいやだ、近くに使えるものがあるんだから使っておこうそういう考えに至った。

そうそう、話しを戻さないと。昨日、あいつがなんで笑って泣いていたのか。そんなことわかるわけないのに考えて寝れなかった。たったそれだけ。

「うぉっ！」

何かに右腕をつかまれた。ごつごつしていて、でかい。握りしめてる力も半端じゃない。これでも本気ではなさそうだった。さびた首を動かし、ぎこちなく後ろを向いた。肉がそこにいた、どこで鍛えたのかわからないくらいの筋肉たちが俺の前に。

それも半裸だったのでよくわかった、いや見えた。

呆気にとられていた俺は、そのまま立ちすくんでいた。

「じゃまだ！小僧！つっかえてんじゃねー」

お前も同じ高校生なら小僧のうちに入るんじゃ……なんて思った。そのあとすぐつかんだ腕を後ろに引かれ、バランスを崩した。あの肉は俺を助けることはせず、先へ行ってしまった。

俺を退(ど)かしてそのままなのか……体が無駄にでかいお前が悪い。けど横ににスペースはあったよな？バランスを崩しながら、眼球を動かた。やつは笑ってやがった。

これはまずい。何がまずいって？今、俺は学校に行くまでの坂を上っているから。それが何でまずいかって？そりゃあ角度が尋常ないからだ。昨日、上った時も押され転げたら下に着くまでに生きていられるのか、と心配したほどだ。俺はこの坂を階段にしたほうがいいと思った。

今はそんなこと考えてる場合じゃねーよな、これじゃあ転がっていって変死体、発見！なんてことになりかねない。足を地面に押し付け、腹に力を入れた。俺は必死だ。

「うおーーーー」

生きろ！俺！今、死んではならない。己の約束がまだ果たせていないんだ。俺の筋肉共が悲鳴をあげている。あと少し、あと少しでバランスがとれ……。

「あっ……無理」

俺の筋肉は弱かった。耐久性が無かったのだ。そのまま、後ろに倒れていった。

さよなら……俺の人生。つらい時期もあったけど、一昨日と昨日は楽しかった。くそ、あの肉、化けててきてやる。捌いて食ってやる。あいつに一言、言いたかったしっかり魔女になれよって。

ん？おかしい、落ちてる感覚がしない。それよか、体制が戻ってる？

「神田、何やってんの？」　見知らぬ男が声をかけてきた。そいつが俺のことを支えていた。顔は地味、髪は短く切られていて、肌は黒く焼けていた。

「誰だ、お前。俺はそっちを知らないんだけど。まあ、とりあえずありがとな」

俺は歩きだした、そいつも着いてきたわけで。

「あーそうか、そうだよなぁー。お前、有名になってるから」

「はっ？」

言ってることがよくわからない、何言ってんだ。そこから会話が続いた。

「神田さ―入学式のとき休んだだろ？それだよ」
「なに、俺が休んだから。有名になったと？」
「そうそう、だってさ校長が名前まで言ったんだぞ」
「マジか。あのエロ魔人……」
「それでもう一人、式をさぼったやつは？」
「なんで俺に聞く」
「昨日、一緒に来て。一緒に帰ったって聞いたんだけど」
「よく知ってるな」
「顔は広いから。あっ俺、大分栄一郎（だいぶんえいいちろう）、栄一郎と呼んでもらって結構！俺はいろんな情報があちこちから……あっ、そうそう勇者校長の銅像見てくれた？あれ実は……俺の友達が作ったんだぞ！すごいだろ！それで俺はそこに勇者と彫ったんだ」
　最後のはどうでもいい話だった。
　そうこうしてる間に俺達は学校に着いていた。校舎前にいたマスクな怪しい人影を発見した。そのマスクはよく強盗とかで使う、目と鼻、口が開いたスキー用のマスクでやっぱり怪しかった。そいつはきょろきょろあたりを見回しながら茂みに隠れた。怪しい、見るからに怪しい。俺は目を細め、目を凝らしていた。するととなりから声が聞こえた。
「そっちの方向は！」
「そっちの方向には何があるんだ？」
　栄一郎は腕時計を見た。かなり焦っている様子だ。
「やっぱり……この時間。あの方向……行くぞ！」
　何かを決心したように時計から目をあげて、そっちの方向を見た。腕を掴まれて人影が進んでいった茂みに進もうとする。
「行くぞってどこに」
「いいから俺についてこい」
　半ば強引に連れてかれた。茂みを抜けテニスコート左手に見て進んだ。すると、建物が見えてきた。建物はそんなに大きくはなく、コンクリートで作られた物置みたいだ。そこにはさっきの人影がい

て、中を覗こうとあがいている。覗き魔じゃねえか。中には女子がいるということになるよな。ここはかっこいいところを見せて、「きゃーかっこいいー」「私と付き合ってください」「何言ってるの私よ」などと言われて高校生活を楽しく……

「勇気、なんか気持ち悪いぞ、顔が」

やばっ、いつもの妄想が。顔に出てたのか。焦ったが、何ごともなかったかのように。

「何言ってんだよ、俺は普通だったが？」

「気持ち悪かったというか、気持ち悪エロかった」

なんだよそれ、とりあえず行くか、早くしないと、逃げられる。俺は茂みから顔を出し、

「お前何やってんだ、覗きはやめろ！」

大声で怒鳴ってやった。相手は驚いて、腰を抜かした。こりゃあ楽勝だ。

「栄一郎、捕まえに行くぞ！」

「えっ……いいよ俺は」

ひどく怯えていて、石造のように固まっていた。どうしたというんだ、まさに蛇に睨まれた蛙のようだ。俺、一人じゃ取り押さえられそうもなかった、だから強引に持っていった。

俺は犯人を抑え込んだ、その相手が抵抗してくる。

「お前も手伝えよ」

「えーと、おお俺は……」　血の気が引いていた。どうしたというんだ。早くしないと逃げられる。

「なにやってるのよ！」

女子だ。窓からのぞいていた。やっときずついたか、これで覗きは失敗に終わった。覗き魔はあきらめたように抵抗するのをやめた。

「残念だったな」

マスクを引っぺがした、そこには見たことのあるような顔。ていうか昨日見た顔だった。

『エロ魔人！』

ユニゾン。そこに居る女子達と。最近多いなー。
女子たちはぞろぞろと建物――テニスの部室から出てきた。
「最近はおさまっていると思ったら、油断してたわ」
「今度こそ再起不能になるまでやっちゃわない？」
「あっ！ダイブもいるー」
今度は何なんだ。だいぶ？
「エロ魔人とダイブ、二人で何してるのかな？」
「俺？いや、そのえっと、俺達は……なあ？」　どうして俺に振った？言えばいいだろエロ魔人を捕まえに来たと。女子からはダイブって呼ばれてんだな、てか早いなお前の名前知られるの。
「私はな同好会の活動をしようと思ってだな」
「俺は、校長を捕まえようと……して……ですね、その」
「言い訳無用。ファンタスティック同好会。二名。すばらしいことを探し、幻想的なことを求め、体感する活動。とか言っておきながらやることなすことエロいことばっか」「そりゃあもう、幻想的なんで。俺達にとっては未知なることなんですよ。これも活動の一環として見逃してくれませんか？」
必死に弁解してやがる、よく分からないが大変だなお前。あっ土下座まで始まった。「私からもよく言っておくんで、ここは許してやってもらえませんかねー」
「師匠！やったのはあんたじゃないか！」
師匠！？いつの間にそんな関係になったんだ。
今、直感した、まずい気がする。俺の野性的感がそう告げてる、早く逃げろと。
「んで？あんたは？」
こっちに振ってきた！どうすりゃいい、この二人に囲まれてたら普通の弁解じゃあそこらへんに散っているチリのごとく無視されるぞ。何かいい案を。何か。
「私と一緒に覗きやりました」
「エロ魔……校長！？何言って……」

はい。もう弁解不可能になりました。俺の素晴らしい高校生活……。

「やっぱり、新しいメンバーね」　変態二人それから俺。捕えられました。

これから、どうなるんだ。警察行きはまずいな、それだけは勘弁してもらいたい。ドアが開く音がした、まだいたのか。

ずいぶんとクールそうな女子が出てきた。きれいな人だった。顔は整っていて、髪は腰まで長く、胸は小ぶりだがいい形をしている。すらりとした足、体がモデルのようだった。本当にこんな人モデルにいそうだ。

「湊（みなと）ちゃん、こいつを知り合いだったよね？」

「はい？何でしょうか？」

小首を傾げてる。さっきの騒ぎ聞いてなかったのかよ、なんて無頓着なやつ。

「このダイブが部室、覗いてた」

「俺は覗いてませんって」

「ん？栄一郎……覗いてた？」

「よっ、湊。元気してたか？」

その湊と呼ばれた人は顔が赤くなり、なんだか恥ずかしそうに俯いた。

「湊ちゃん？」

そして戻った。戻ったといってもクールという感じではなく冷徹な感じに、顔色は戻ってないけど。

「やっちゃいましょう。この人達やっちゃいましょう。特に栄一郎中心に」

「おれぇー！？」

栄一郎は戦慄（わなな）いていた。

それから俺達は、チャイムが鳴るまで。ペッパーを振りかけられていた、それはもうくしゃみが止まらなかった。目に入りそれはそれは痛かった。たが俺とエロ魔人はまだ良かった、なぜなら栄一郎

にかかったのが軽く飛び散って俺達が受け止めただけだったからだ。
チャイムが鳴り、俺達は開放された。いち早く着替え終わった湊とやらが部室を見張っている。
この学校は、八時三十分に一回、その二十分後に二回目そして授業が始まる時の九時に三回目がなるシステムになっている。一回目の部活が終るチャイム、それが鳴ったのだ。
「おい、大丈夫か？」
兎の眼のように赤くなっている。涙とくしゃみのせいか鼻水かだいぶ出てきてる。さっきはどんまい、と軽く思ったが。ちょっとやばそうなんで、部室近くに水道が出ている場所を発見して、目と鼻を洗わせた。鼻を重点的に、見てて汚かったから。
「湊のやつー、だからあいつ嫌いなんだ。俺だけ狙ってくるからさー」　幼馴染で小学校から一緒だそうだ。いいよなそんな関係、俺には無いから。
魔人は解放されたらさっさとどっかへ行ってしまった。また何かしてなければいいが。
「勇気、もうそろそろ時間だ。行くか」
「俺はどうすればいいんだ」
クラス知らねーやどうするかな。やっぱり職員室か？
「言ってなかったが俺とお前一緒のクラスだから」
よろしくなっ！とウィンク。気持ち悪かった。鼻水まだ出てたし。
そんな俺にとって負の朗報を聞いて、クラスに向かった。
「そういえば……」
何か忘れてるような、そんな気がした。

第三章（後書き）

またファンタジーが書けなかった、すいません。ファンタジーじゃない方がいいのかも……。
近いうちに入れ込む予定なのでやっぱりファンタジーで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1717n/

千里の魔女の道

2010年10月8日13時46分発行